

# 家庭科における住居分野の学習経験に関する調査

## Research on Learning Experience of Housing Areas in the Home Economics Education

栗 山 恵都子

### 1. 緒言

学校教育の中で、「住まい」に関する学習は、家庭科、生活科、社会科、理科、保健の分野に係る。その中で住居を体系的に扱っている学習領域は、家庭科のみである。

現在の学校教育課程における家庭科は、小学校課程の5, 6年生から高等学校課程までの履修が義務付けられている。小学校課程では、男女ともに共修であるが、中学校課程では、昭和33年以降、「技術・家庭科」として、男子が技術科、女子が家庭科と分離していたが、その後、昭和52年改訂により履修内容の男女相互乗り入れが開始された。平成元年以降は男女共修となり、1993年に中学校で、1994年には高等学校の家庭科で男女共修が実施されるようになった。これにより、学校教育現場においては男女性差の別なく、家族関係の中で協力して家庭を築くことの重要性、さらには福祉や環境への理解、消費者教育と広く学ぶ方向へと移行した。家庭科が義務教育を含む教育課程の中で、男女共修科目として位置づけられたことの意義は大きい。

家庭生活を営む上で、住居について学ぶことは非常に重要である。大学・短期大学・専門学校等の高等教育では、建築学や住居学を専門に学ぶ機会はあるが、小中学校、高等学校での基礎的部分となる学習の機会は家庭科が中心となる。しかし、家庭科の学習の中で、住まいに関する学習の比重は極めて小さいと言わざるを得ない。

昨今、大きな自然災害を契機に、生活環境の安全について見直しが行われている。

1995年1月の阪神・淡路大震災による死者数5,483人（関連死919人除く）のうち、72.57%（3,979人）の死因は、窒息・圧死であった。さらに7.75%（425人）は外傷性ショックであり、全体の約8割が家屋倒壊、家具転倒によるものとみられた<sup>1)</sup>。このことは住まいの安全性を根本から見直し、全国の公共建築から一般住宅まで、建築物の耐震補強を実施するなどの積極的な改善措置が行うきっかけとなった。行政の指導のもと、ハード面の改善は進んだといえるが、しかし生活者の日常的な営みの中でのより安全な暮らし方、住まい方に関する情報といったソフト面は、さほど大きく取り上げられることがなく、生活者自身に任されている面がある。これは、生活習慣や住宅事情、住まい方などは個人のプライベートな部分であるため、一律的な行政指導によって改善できるものではないことに起因すると考えられる。

また、昨今の快適な高性能住宅が、生活者の健康を害する一面も指摘されている。温湿度を一定に維持するための気密性が、通気を損ない、アレルギーなどの疾患の一因ともなるのである。しか

し生活者自身が住まいのあり方を学ぶ機会に恵まれず、基本的な知識を得られぬまま成人し、室内環境を整える必要性に気づくことができない。

これらの改善策として、最も効果が得られやすいのは、「住まい」に関する教育機会を増やすこととは言うまでもない。その最たる教育機会は学校教育による学習機会であり、住まいについて体系的に学ぶ機会が提供されている家庭科が最も適しているといえる。

## 2. 本研究の目的

家庭科教育の中で、住まいの広範囲にわたる分野の学習理解の現状を把握することは、生活者の今後の適正な住まい方を実践するため、必要な知識を埋める機会を作りやすい。同時に、生活者の関心の方向性を解き明かすことは、今後の学習意欲を高め、必要な知識の習得に役立つであろう。住居領域の知識の習得は、専門家による適正な指針が必要と考えられる。だが、学習者にとっての必要性や興味関心は無視できるものではない。

本調査は、本学短期大学の学生を対象に、高等学校の家庭科の履修による住居分野の学習経験を問い、その必要性や関心の度合いを調査することを目的とするものである。またさらに、生活者自身が役に立つと考えている住居分野を調査することとする。これは、今後の学習機会とのマッチングによって、より良い住まい方の実践に繋がるものと考えられるため、今後の住居教育のあり方を検討する材料となることが期待されるものである。

## 3. 調査の対象

生活科学の基礎を履修する短期大学1，2年次の学生を対象に、アンケート調査を実施した。対象学生の所属は、食物学科、現代コミュニケーション学科である。高等学校の家庭科の履修状況を問うため、外国人留学生は、本調査の対象から除外した。高等学校を卒業して間もない1年次学生が中心であるが、一部2年次学生も含まれる。調査対象となる学生の、短期大学入学後の住居領域の学習経験は、食物学科、現代コミュニケーション学科とも1年次、2年次とも住環境論を履修した学生はいない。

調査票は調査対象学生の基本属性および高等学校の家庭科の履修状況、学習経験のある住居分野、同項目のうち、将来的に役立つと考える分野について尋ねた。

調査時期は2014年4月、調査票を直接配布、直接回収方式で実施し、集計及び分析はExcel及びC-Analysisを用いた。

調査対象学生の概要をTable. 1に示す。

Table.1 調査対象者の概要

学科別/学年別人数比

|     |     |    |       |    |        |
|-----|-----|----|-------|----|--------|
| 現コミ | 1年次 | 35 | 66.0% | 53 | 69.7%  |
|     | 2年次 | 18 | 34.0% |    |        |
| 食物  | 1年次 | 23 |       | 23 | 30.3%  |
| 合計  |     | 76 |       | 76 | 100.0% |

男女別人数比

|      |    |        |
|------|----|--------|
| 女子学生 | 73 | 96.1%  |
| 男子学生 | 3  | 3.9%   |
| 合計   | 76 | 100.0% |

学科別の内訳は、現代コミュニケーション学科の学生が69.7%、食物学科の学生が30.3%であった。男女比は、男子学生3.9%、女子学生96.1%、ただし男子学生はすべて食物学科に所属する。学年別構成をみると、1年次76.3%、2年次23.7%である。食物学科は全て1年次であり、現代コミュニケーション学科は2年次学生が18人含まれる。

調査対象学生の出身学校区分をTable.2に示す。

Table.2 調査対象者の出身学校区分

小学校

|    |    |        |
|----|----|--------|
| 私立 | 4  | 5.3%   |
| 公立 | 72 | 94.7%  |
| 合計 | 76 | 100.0% |

中学校

|    |    |        |
|----|----|--------|
| 私立 | 8  | 10.5%  |
| 公立 | 68 | 89.5%  |
| 合計 | 76 | 100.0% |

高等学校

|    |    |        |
|----|----|--------|
| 私立 | 22 | 28.9%  |
| 公立 | 54 | 71.1%  |
| 合計 | 76 | 100.0% |

学校種別は公立高等学校が71.1%を占め、私立は28.9%であった。なお専攻種別をみると、普通科74.4%、その他の専攻が25.6%である。なお、出身地は一人を除く75名が静岡県内である。

次に、使用した家庭科教科書の区分をTable.3に、また、学科別に示したものをTable.4に示す。

Table.3 使用教科書の区分（全体）

|        |    |        |
|--------|----|--------|
| 家庭総合   | 39 | 50.0%  |
| 家庭基礎   | 31 | 39.7%  |
| 生活デザイン | 5  | 6.4%   |
| わからない  | 3  | 3.8%   |
| 合計     | 78 | 100.0% |

Table. 4 使用教科書の区分（学科別）

| 教科書種別  | 食物     | 現コミ    |
|--------|--------|--------|
| 家庭総合   | 63.2%  | 48.2%  |
| 家庭基礎   | 31.6%  | 44.6%  |
| 生活デザイン | 5.3%   | 7.1%   |
| 合計     | 100.0% | 100.0% |

高等学校で使用する家庭科の教科書は、『家庭総合』『家庭基礎』『生活デザイン』の選択制である。多くは『家庭総合』『家庭基礎』を使用しており、『家庭総合』は4単位（140時間）、『家庭基礎』は2単位（70時間）を履修する。このうち『家庭総合』では、住居の機能、住空間の計画、住環境などについて科学的な理解、住生活の文化への関心を高め、安全と環境に配慮して主体的に住生活を営むことができることを目的に、2年間にわたって学ぶ<sup>2)</sup>。

全体では、50.0%の学生が『家庭総合』を使用し、次いで『家庭基礎』が39.7%であった。使用教科書の分類がわからない、忘れた、無記名と解答する学生が3.8%おり、家庭科そのものへの関心の低さがうかがえる。受験に関係する科目ではないことから、学生自身の関心が低いばかりではなく、高等学校の取り組みの薄さも起因しているものと思われる。

『家庭総合』の履修状況は、Table. 4 が示すように、現代コミュニケーション学科の48.2%に比べ、食物学科は63.2%と高い。学科選択の際に生活系学科である食物学科に進路選択していることからみると、家庭科の履修機会の時間数が影響しているものと考えられる。

#### 4. 調査の結果と考察

高等学校の家庭科の授業において、各分野にかけた時間の割合を、調査対象者の記憶をもとに主観で回答を求めた。その結果をFig. 1 に示す。高等学校の授業の記憶は、各分野の興味関心度、理解度に大きく左右されるものと考えられ、また教員側の知識量や授業の質の高低に大きく関係すると思われる。

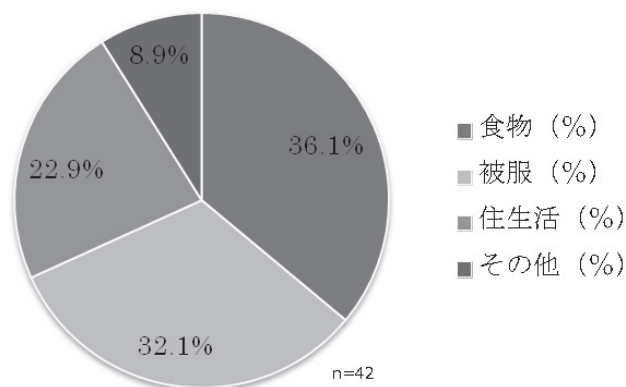


Fig. 1 家庭科学習分野の時間割合（高等学校）

本設問に対しては無回答が45%と高く、家庭科学習に対する関心の低さが特に顕著であった。回答のうち、「衣」「食」に関する学習はそれぞれ36.1%、32.1%、「住」は22.9%であった。「その他」は、家族関係や消費者教育などの分野である。住居分野の学習は、「衣」「食」に比較すると約10%程度の低い結果を示す結果となったが、その理由として、「住」分野は実技を伴わない学習形態が多く、調査対象者の記憶に残りにくいことが一因と考えられる。これは、教員側の問題として、住居分野の授業運営の困難さを表すものとも考えられている<sup>3)</sup>。

全調査対象者に対し、小中高12年間の学校教育期間での住居分野について、それぞれの項目ごとに、その学習機会の有無と、将来、一生活者として生きていく上で必要と考える分野についてたずねた。その結果を、Table.5に示す。

学校教育において「住まいの機能」の学習経験は高い数値を示しており、住居とは何かという住居教育の導入部分は学んでいる人が多かった。他の分野では「家族の生活とすまい」のように、家族関係分野との関連付けやすい項目が比較的高かった。建築物の環境工学分野である「光環境」、「熱環境」、「空気環境」は物理との関連性があるため、高等学校では学習しやすい分野と考えられる。「住宅問題」「住宅政策」などは、住宅関連訴訟などの法的知識、経済政策、法律改正など最新の動きや時事問題に明るいことが必要であり、学校教育の現場では扱いにくいと思われる。

学校教育現場での学習経験が少ない項目は、「住まいの手入れ」、「住居の維持管理」、「インテリア計画」、「家庭内事故」であった。「住まいの手入れ」と「住居の維持管理」は関連性が高く、将来、生活者として主体的に家庭や住まいを維持運営する上で必須の知識である。「家庭内事故」については、高齢社会への対応として極めて重要である。65歳以上の高齢者の場合、死亡事故全体の6割以上が住宅内で発生している現実を注視し、安心安全で、自立した生活を支え、生活のQOLを高めるためには極めて重要であると考ええる。

一方、調査対象者自身が、将来的に必要であると考える項目についてみていくと、「住宅の選び方」が最も高く、住居の賃借や購入の知識など、実利面を重視していることがわかる。さらに「住まいの手入れ」の項目も高く、「住まいの選び方」と同様、生活者としての実践的な知識の習得を望んでいることがわかった。調査対象者が非常に重視しているこの2項目について、学校教育での学習経験は少ない。「家庭内事故」についても同様に学習経験が少ない分野であるにもかかわらず、必要性が高いことを示す結果となった。

Table. 5 住分野の学習経験および将来の必要性

|                     | 学習経験 |      | 必要性  |      | 指数* |
|---------------------|------|------|------|------|-----|
|                     | 有    | 無    | 有    | 無    |     |
| 1 住まいの機能            | 0.81 | 0.19 | 0.95 | 0.05 | 31  |
| 2 気候と住居             | 0.66 | 0.34 | 0.88 | 0.12 | 40  |
| 3 住まいの歴史            | 0.45 | 0.55 | 0.44 | 0.56 | 33  |
| 4 音環境(騒音・遮音)        | 0.47 | 0.53 | 0.95 | 0.05 | 17  |
| 5 光環境(採光・日照・照明)     | 0.56 | 0.44 | 0.96 | 0.04 | 21  |
| 6 熱環境(温度・湿度)        | 0.51 | 0.49 | 0.95 | 0.05 | 21  |
| 7 空気環境(通風・換気)       | 0.56 | 0.44 | 0.96 | 0.04 | 21  |
| 8 整理・整頓             | 0.53 | 0.47 | 0.95 | 0.05 | 23  |
| 9 住まいの手入れ           | 0.37 | 0.63 | 0.97 | 0.03 | 8   |
| 10 住居の維持管理          | 0.22 | 0.78 | 0.88 | 0.12 | 18  |
| 11 家族の生活と住まい        | 0.68 | 0.32 | 0.96 | 0.04 | 27  |
| 12 ライフステージの変化と住まい   | 0.48 | 0.52 | 0.83 | 0.17 | 36  |
| 13 ライフスタイルによる住居の選び方 | 0.42 | 0.58 | 0.89 | 0.11 | 22  |
| 14 住宅の選び方           | 0.45 | 0.55 | 0.99 | 0.01 | 9   |
| 15 間取り・レイアウト計画      | 0.60 | 0.40 | 0.95 | 0.05 | 27  |
| 16 平面図              | 0.60 | 0.40 | 0.87 | 0.13 | 41  |
| 17 インテリア計画          | 0.22 | 0.78 | 0.91 | 0.09 | 15  |
| 18 家庭内事故            | 0.32 | 0.68 | 0.95 | 0.05 | 9   |
| 19 防災と住まい           | 0.48 | 0.52 | 0.95 | 0.05 | 18  |
| 20 地域の住環境           | 0.48 | 0.52 | 0.84 | 0.16 | 35  |
| 21 まちづくり            | 0.59 | 0.41 | 0.87 | 0.13 | 40  |
| 22 地域のコミュニティ        | 0.52 | 0.48 | 0.92 | 0.08 | 29  |
| 23 住宅問題             | 0.34 | 0.66 | 0.87 | 0.13 | 25  |
| 24 住宅政策             | 0.33 | 0.67 | 0.88 | 0.12 | 21  |
| 25 環境に配慮した住まい方      | 0.45 | 0.55 | 0.89 | 0.11 | 23  |

\*指数について

学校教育での学習機会が無い、もしくは少なかったが、将来的に重要な分野と考えている分野を明らかにするために、数値化、点数化をしたものである。

学習経験は、教科書種別によって単位数が異なることから、学習時間に大きな差がある。『家庭総合』は時間数140時間あり、『家庭基礎』70時間の2倍の学習機会がある。したがって、『家庭基礎』履修者は、学ぶ機会を得られない項目があることが予想されることから、それぞれの履修状況によって、必要と考える項目に有意な差がみられるかを検討する。

『家庭総合』履修者の結果をTable. 6、『家庭基礎』の結果をTable. 7に示す。

Table. 6 住分野の学習経験および将来の必要性（『家庭総合』履修者）

|                     | 学習経験 |      | 必要性  |      | 指数* |
|---------------------|------|------|------|------|-----|
|                     | 有    | 無    | 有    | 無    |     |
| 1 住まいの機能            | 0.79 | 0.21 | 0.92 | 0.08 | 33  |
| 2 気候と住居             | 0.72 | 0.28 | 0.87 | 0.13 | 38  |
| 3 住まいの歴史            | 0.46 | 0.54 | 0.38 | 0.62 | 33  |
| 4 音環境(騒音・遮音)        | 0.46 | 0.54 | 0.97 | 0.03 | 10  |
| 5 光環境(採光・日照・照明)     | 0.62 | 0.38 | 1.00 | 0.00 | 20  |
| 6 熱環境(温度・湿度)        | 0.56 | 0.44 | 0.95 | 0.05 | 23  |
| 7 空気環境(通風・換気)       | 0.64 | 0.36 | 0.97 | 0.03 | 22  |
| 8 整理・整頓             | 0.44 | 0.56 | 0.95 | 0.05 | 13  |
| 9 住まいの手入れ           | 0.23 | 0.77 | 0.97 | 0.03 | 5   |
| 10 住居の維持管理          | 0.21 | 0.79 | 0.87 | 0.13 | 16  |
| 11 家族の生活と住まい        | 0.77 | 0.23 | 0.92 | 0.08 | 32  |
| 12 ライフステージの変化と住まい   | 0.49 | 0.51 | 0.82 | 0.18 | 35  |
| 13 ライフスタイルによる住居の選び方 | 0.49 | 0.51 | 0.85 | 0.15 | 33  |
| 14 住宅の選び方           | 0.49 | 0.51 | 0.97 | 0.03 | 15  |
| 15 間取り・レイアウト計画      | 0.69 | 0.31 | 0.92 | 0.08 | 30  |
| 16 平面図              | 0.67 | 0.33 | 0.85 | 0.15 | 41  |
| 17 インテリア計画          | 0.21 | 0.79 | 0.90 | 0.10 | 14  |
| 18 家庭内事故            | 0.28 | 0.72 | 0.92 | 0.08 | 12  |
| 19 防災と住まい           | 0.46 | 0.54 | 0.92 | 0.08 | 16  |
| 20 地域の住環境           | 0.54 | 0.46 | 0.79 | 0.21 | 40  |
| 21 まちづくり            | 0.56 | 0.44 | 0.87 | 0.13 | 32  |
| 22 地域のコミュニティ        | 0.46 | 0.54 | 0.90 | 0.10 | 21  |
| 23 住宅問題             | 0.36 | 0.64 | 0.82 | 0.18 | 28  |
| 24 住宅政策             | 0.31 | 0.69 | 0.87 | 0.13 | 20  |
| 25 環境に配慮した住まい方      | 0.46 | 0.54 | 0.87 | 0.13 | 23  |

『家庭総合』履修者は、「住まいの手入れ」、「住居の維持管理」「インテリア計画」の学習機会が少なかったことがわかる。今後必要と考える項目を見ると、生活環境の中で、採光や日照などの視環境や照明などの光環境を需要視している傾向が見られた。他の項目では、温熱環境や空気環境、音環境などの環境工学分野は環境を構成する要素として重要であるとする顕著な傾向が表れている。さらに「住宅の選び方」を重視しており、一生のうちでもっとも大きい買い物である住宅の選定が生活設計に大きく影響するものであることを認識しており、非常に重要と考えていることが伺えた。また、「家庭内事故」といった安全面も重視する傾向がみられた。

Table. 7 住分野の学習経験および将来の必要性（『家庭基礎』履修者）

|                     | 学習経験 |      | 必要性  |      | 指数* |
|---------------------|------|------|------|------|-----|
|                     | 有    | 無    | 有    | 無    |     |
| 1 住まいの機能            | 0.79 | 0.21 | 0.92 | 0.08 | 33  |
| 2 気候と住居             | 0.72 | 0.28 | 0.87 | 0.13 | 38  |
| 3 住まいの歴史            | 0.46 | 0.54 | 0.38 | 0.62 | 33  |
| 4 音環境(騒音・遮音)        | 0.46 | 0.54 | 0.97 | 0.03 | 10  |
| 5 光環境(採光・日照・照明)     | 0.62 | 0.38 | 1.00 | 0.00 | 20  |
| 6 熱環境(温度・湿度)        | 0.56 | 0.44 | 0.95 | 0.05 | 23  |
| 7 空気環境(通風・換気)       | 0.64 | 0.36 | 0.97 | 0.03 | 22  |
| 8 整理・整頓             | 0.44 | 0.56 | 0.95 | 0.05 | 13  |
| 9 住まいの手入れ           | 0.23 | 0.77 | 0.97 | 0.03 | 5   |
| 10 住居の維持管理          | 0.21 | 0.79 | 0.87 | 0.13 | 16  |
| 11 家族の生活と住まい        | 0.77 | 0.23 | 0.92 | 0.08 | 32  |
| 12 ライフステージの変化と住まい   | 0.49 | 0.51 | 0.82 | 0.18 | 35  |
| 13 ライフスタイルによる住居の選び方 | 0.49 | 0.51 | 0.85 | 0.15 | 33  |
| 14 住宅の選び方           | 0.49 | 0.51 | 0.97 | 0.03 | 15  |
| 15 間取り・レイアウト計画      | 0.69 | 0.31 | 0.92 | 0.08 | 30  |
| 16 平面図              | 0.67 | 0.33 | 0.85 | 0.15 | 41  |
| 17 インテリア計画          | 0.21 | 0.79 | 0.90 | 0.10 | 14  |
| 18 家庭内事故            | 0.28 | 0.72 | 0.92 | 0.08 | 12  |
| 19 防災と住まい           | 0.46 | 0.54 | 0.92 | 0.08 | 16  |
| 20 地域の住環境           | 0.54 | 0.46 | 0.79 | 0.21 | 40  |
| 21 まちづくり            | 0.56 | 0.44 | 0.87 | 0.13 | 32  |
| 22 地域のコミュニティ        | 0.46 | 0.54 | 0.90 | 0.10 | 21  |
| 23 住宅問題             | 0.36 | 0.64 | 0.82 | 0.18 | 28  |
| 24 住宅政策             | 0.31 | 0.69 | 0.87 | 0.13 | 20  |
| 25 環境に配慮した住まい方      | 0.46 | 0.54 | 0.87 | 0.13 | 23  |

『家庭総合』の半分の時間数の履修である『家庭基礎』履修者の傾向は、「インテリア計画」の学習機会が特に少なかったことがわかった。今後の必要な項目としては、『家庭総合』履修者と同様に「住宅の選び方」を重視すると同時に、「地域とのコミュニティ」も重要と考える傾向がみられた。履修機会が少なく、さらに今後も重要とする項目として「インテリア計画」を最も重視する傾向があり、『家庭総合』履修者との大きな差は、住宅内部の環境整備に必要とされる環境工学分野は重視する傾向はみられず、続いて「住宅内事故」などの安全面も重視していないことが伺え、インテリアといった視覚的な心地よさや美しさに傾く傾向がみられた。

## 7. 引用文献

- 1) 兵庫県HP, [https://web.pref.hyogo.lg.jp/pa20/pa20\\_000000016.html](https://web.pref.hyogo.lg.jp/pa20/pa20_000000016.html), 2014.10
- 2) 碓田智子, 学校教育での住まいの教育, 建築雑誌, vol.129, No.1657.2014.04
- 3) 三浦真帆 他, 家庭科教師の意識とその教育実態 学校における住まい・まち・環境教育に関する研究(3), 日本建築学会北海道支部研究報告集No.84, 2011.07

